

氏名	ナカ 中	モト 本	チ 千	ヘル 晴
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第394号			
学位授与年月日	平成25年3月25日			
学位論文等題目	〈論文〉vertigo—空覚—浮遊する上空都市の断片構成 〈作品〉空覚			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	箕浦昇一
（論文第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	藤崎圭一郎
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	河北秀也
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	清水泰博

（論文内容の要旨）

初めて飛行機に乗ったのは、あまりにも幼い頃の出来事で、今となっては、記憶は断片的である。詳細は覚えていない。

誰にとっても、生まれて初めて飛行機に乗り空に舞い上がった時の印象は新鮮であろう。恐怖心とワクワクするような期待感との両方を持ちあわせているのではないか。私も例外ではない。空を飛んだという事実だけが、強く心に刻印されている。その後の旅のことなどは記憶にないが、ただ、タラップを上る時の高揚感、離陸する時の緊張感だけは忘れようもない。そして、空からの故郷の街や山、川を眼下に見晴らし、海を越えて行く時の鮮烈な体験が脳裏に残っている。生まれた土地を離れて生活するようになり、ますます飛行機に乗る機会が増えている現在、この非日常的な視覚体験は、もはや日常の視覚体験の一部となっている。

上空から地上の世界を広く見渡したいという欲求は、その根源にある動機が何であれ、多くの人々が共通して持つものである。飛行機の発明は、人々の視覚を改めた。機上の人となって上空を遊覧移動することで、普段とは異なる「俯瞰する景観」を目にすることができるようになった。また、航空機などからの写真や映像、最近ではGoogle Earthのような画像情報の流通は機上体験の代補となった。さまざまな媒体を通じて、手軽に空中から「俯瞰するまなざし」を得ることが可能になったのだ。真上から直下に見下ろし、そこから情報を得ようとする姿勢、遥かに地平線までを見渡し状況を把握しようとする人の知覚は、飛行機の発明・実用化なしには成長を見なかったものであろう。

俯瞰は、都市の上空にあるもうひとつの風景の発見である。普段より遥かに高い場所で、かつ常に移動する視座を獲得したことで、幾何学的景観と人工・自然景観を含めて目にすることができる。水平線が常に変わり続けるこの空の景色は、新たな美観・美意識を生み、また、イメージーションを喚起するソフトウェアであると考えられる。

加えて、機上体験の中では、平衡感覚を失うことがままある。パイロットがよく陥ることがあるこの状況を「vertigo」（ヴァーティゴ）と呼ぶ。空と海、星空と地上のネオンなどの区別がつかなくなる。パイロットの感覚とは全く同じとは言えないだろうが、私も水平を見失い、まるで天と地が逆転しているかのような感覚を覚える。特に離着陸時や大きく旋回する時、気流の影響で高度の上がり下がり激しい時、雲や霧の中、夜間などに多く、浮遊感を伴った視覚を体感する。それはストロボのように強く、

小刻みに不規則なリズムを持って、私の心に訴えかけてくる瞬間の連続であり、断片的な私たちとして記憶に残る。これが私にとっての空の景色であり、リアルで強烈な「俯瞰」の感覚である。

「俯瞰するまなざし」は、“客観的視点”や“神の視点”であるとされることが多い。それゆえ、さまざまな人々とコミュニケーションすることが可能になり、人々をつなぐメディアとして成立する。しかし、それは単なる客観的に人と共有できる客観的視覚の域を超えて、「vertigo」の際のパイロットの揺さぶられる感覚のように、多くの人々の想像力に刺激を与えるものを生むことができるのではないだろうか。

人は、外界を感知するためのさまざまな感覚機能を持つ。視覚は、人の感覚器の中で優れたものとして位置付けられており、最も多くの情報を提供する。このことは、視覚が新しい外界環境を体験するたびに、新たな空間認識と把握の方法が必要となってくることを意味している。また、体験の数だけ視覚は増殖し、それとともに新たな空間認識の感覚が発達すると考えられる。

「俯瞰」という見る行為は、近代になってから広く認知されるようになった視覚のひとつである。本論文の意図することは、俯瞰姿勢をもつメディアや作品を考察するとともに、個体験に基づく「俯瞰観」を整理し、創作の姿勢を明らかにするものである。

第1章の「視覚—俯瞰に至るまで」では、時代の流れや文明の発達とともに視覚も多種多様に変化を遂げる中で、「近代的な俯瞰」の発見に至るまでの経緯を概観する。

1858年にF. ナダールがフランス・パリ上空からの気球写真を発表したことによって、大衆は「俯瞰のまなざし」を獲得した。それから150年以上もの月日が流れた現在、世の中には、さまざまな俯瞰的要素を持つメディアが溢れ、広く世界に流通している。もちろん、ナスカの地上絵など古代から俯瞰のまなざし自体は存在した。本章では近代以前を含めた、さまざまな俯瞰の事例を考察する。

第2章の「見えないのにつくるもの／見せるためにつくるもの—俯瞰の姿勢をとるメディア」では、俯瞰でものを見る姿勢をさらに深く考察する。

上空から真下を眺める俯瞰は、真正面から平面を対峙する姿勢である。このまなざしでは、面がまとなりとして見えてくる。壁に掛けられた垂直面を水平にひとつのまよりの面として見ることも同様である。そうした世界では、模様化あるいはパターン化され、日常の立体視から離れるほど抽象的な図像の世界に変化する。真上からの視点が全てを平板化することは、F. ナダールがすでに指摘してことである。面として見ること—それは私自身の制作において重要な位置を占めている。

第3章では、「面としてみること」と“vertigo”では、「面としてみること」と「vertigo」について考察し、そこから得られる自身の「俯瞰観」とは何かを追求し明らかにする。

第4章の「vertigo—空覚—浮遊する上空都市の断片構成」では、この研究によって得られた「空覚」という視覚言語を追求する。「空覚」とは、機上での体験をきっかけとして、ものを面としてみること、それによって水平や垂直が分からなくなること、さらに天地が逆転する感覚から導き出された言葉である。さらに、作品の構成要素である「浮遊」「断片」のふたつのカテゴリーについて述べ、私が手がけてきた作品と表現を論考する。

最後に、「空覚」を表現するため、私は、軽やかに、今を見る、という自身の創作の姿勢を述べて本稿を閉じる。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、空間識失調＝「vertigo」(ヴァーティゴ)に触発されて新たな視覚表現の可能性を考察する論考である。「vertigo」とは、航空機の操縦士が平衡感覚を喪失し、天地の区別や飛行機の傾き、進

行方向などを認知できなくなる状態をいう。しばしば航空事故の原因ともなる。筆者はこの状態に客観的視覚を超えて世界を映し出す新たな知覚を見出そうとする。

筆者はまず俯瞰という世界を真上から客観的に見るまなざしに注目する。最初に近代の進展とともに、人類が飛行船やエッフェル塔などの展望台を作り出すことで、俯瞰というまなざしやパノラマといった新しい視覚を獲得していく過程を概観する。その後、俯瞰と表現にテーマを次第に絞りながら、一点透視でなく多視点で見ることを前提に描かれた地図というメディアの表現としての特殊性への言及し、さらにブラジルの造園家ロバート・ブール・マルクスや、重森三玲の庭園づくりを俯瞰という観点から読み解いていく。

俯瞰とは、垂直方向の視線から世界を「面」というまとまりとして見ることであり、絵画などの芸術表現では、水平方向に対象を「面として見ることも」なされていった。しかし、近代が獲得した、水平もしくは垂直に、世界を客観的に映し出すまなざしが、平衡感覚を失う「vertigo」の状態になると、全く違うものに転じていく。

人間が空を飛行する手段を得て上空から世界を見つめる客観的に俯瞰のまなざしを獲得していくが、同時にめまいにも浮遊感にも似た「vertigo」の状態、世界を面として見るができるのだと筆者は提唱する。この感覚を筆者は「空覚」と名づけ、人の想像力を刺激する豊かな源泉になるだろうと、筆者は仮説を立てていく。本稿は、この仮説を最終的には、自作を論じることで立証しようと試みている。

筆者が大画面に描いた世界は、単純な上空から眺めた風景ではなく、人が近代以降空を飛行することで獲得した新しい身体感覚の記憶の断片から生まれた「心象風景」である。

本論文は、飛行体験の中から客観と主観との間をさまよう身体感覚を見出すことに成功し、それを作品の中で近代を超える新たな視覚表現として実現したことを論じたもので、非常に意義深いものである。よって、本論文を、東京藝術大学大学院美術研究科の博士論文として合格とする。

(作品審査結果の要旨)

非日常的な視覚体験は、現代では日常的な視覚体験の一部となっているとする中本は、その中で「俯瞰する景観」というものを主題におき作品制作を行った。さまざまな視覚的冒険でもある。その作品群には、鑑賞者を階段で登らせ鑑賞させる絵画、俯瞰の状況を鑑賞者に体験させるため実験的世界を屋外に設置した作品、高度から見た風景から発想した抽象表現など試行錯誤した一連の作品群となった。

それは非日常的な視覚体験が、日常的な視覚体験の一部となっている現代では大変難しい表現となるものである。そのような難しい課題に果敢に挑戦した中本は賞賛に値するが、表現すればするほど困難な問題に直面する事となったようである。「俯瞰するまなざし」というものは、芸術表現だけでなくさまざまな分野ですでに表されており、私達は目にしているからである。その事は中本も承知しており、むしろ俯瞰表現を「客観的視点」とか「神の視点」とか言われている大時代的感覚ではなく、人々をつなぐ新しいメディアとして成立させる表現としてとらえた。出てきたテーマは「vertigo—空覚—浮遊する上空都市の断片構成」である。

Vertigoというパイロットが天地逆転し平衡感覚を失う感覚から出発した表現へと転移した中本の表現は広がりを見せる。ミクロとマクロの差、タテとヨコの区別もなくなった世界へと発展していく。そこには模型で表現したミニチュア空間が広がり独特の表現となった空覚を感じさせるものとなっている作品の一群がある。魂を物質から遊離させるに至ったこのミニチュア空間には目を見はるものがある。次に真俯瞰や真正面から対峙する時、水平線や地平線が定まらないというvertigo現象に着目、平板化する視点からの表現を行った。中本は試行錯誤を繰り返しながら勢力的に作品を創り続けた。その姿勢は真摯であり、博士課程合格を認めることとする。

(総合審査結果の要旨)

実体験によりイメージとして見出されていた視覚的感觉をより論理的・具体的に深め拡げて、明治以降日本における絵画手法において主流となっている西洋的遠近法（一つの視点より画面上より自然に見えるように、立体的に描く）による絵画手法・視点でなく、「空覚」（そらかく：ものを面としてみる事によって水平・垂直がわからなくなる感覚）と自ら導き名付けた新しい視点による絵画手法を研究テーマとした試みは意欲的で斬新・新鮮であると評価できる。論文については自らの体験、飛行機に乗る事で得られた自らの体験「俯瞰するまなざし」（立体的でなく水平・垂直に見ることによって平面的な視覚となる）Vertigo（ヴァーティゴ）と呼ばれる「平衡感覚を失う」ことによる浮遊する感覚また「俯瞰と仰望」・「マイクロとマクロ」・「地と図」等二項対立の物でありながら類似性と逆転もありうるものとして語られる新しい視覚の提案としてなされ拡がりをみせている。

新しいメディアとして得られた航空写真。それによって得られたナスカの地上絵・尾上公園・地図・パノラマ観が具体例を持った検証となって述べられており、説得力を持たしている。これらは先に述べた西洋的遠近法と正対する理論でありその主張は成功したといえるだろう。

絵画作品においては、論文によって述べられた「俯瞰するまなざし」で得られた水平・垂直的視点により描かれた緑をベースとして屋上庭園をイメージする作品群、赤をベースとして街をイメージする作品群、Vertigo（ヴァーティゴ）によって浮遊する感覚から導かれる視覚あるいは断片として切り取られた立体的小作品群で構成されており、それぞれが色彩感覚溢れた作品群として共感・共鳴仕合い実感をベースとしたインスタレーション的な展示法と相俟って気持ちのよい空間をつくっている。一つ一つの作品は平面的感覚、あるいは浮遊する断片として切り取られた作品であるが全体を見ると一つの視点と言うより様々な視点・視覚要素を持っている作品群となって好感が持てる。以上の論文・作品群に後期博士課程の技量を十分に満たしていると思われるので合格とする。